志願者本人記載書類の類型とその作成における実情
――高校教員への質問紙調査に見る作成指導の実態から――

○加美山若奈[1,2]，倉元直樹[2]
[1]宮城県佐沼高等学校，[2]東北大学

1. 問題と目的

現在の高校生や高校教員にとって，総合型選抜や学校推薦型選抜は特別なものではなく，一般的な受験機会の一つとなっている。文部科学省(2023)の「令和 5 年度国公私立大学入学者選抜実施状況」によれば，総合型及び学校推薦型選抜による入学者は，4 年制大学入学者数全体において合わせて 50%を占めるまでになっている。それに伴い，一般選抜による入学者は全体の半数を切っていることや，総合型及び学校推薦型選抜ではほとんどの場合，出願時に志願者本人記載書類を課されるということについては加美山・倉元（2024a）が言及している通りである。

しかし，ここには問題がある。これら選抜において利用される志願者本人記載書類は，出願時に提出となる場合がほとんどであるため，他者からの助言や指導が行われる。加えて，指導者の力量や熱意に書類の出来栄えが左右され，ひいては書類作成段階で行われる志願者本人の進学意欲や関心の深まりについても影響を受けることが少なくない。このことは，選抜の妥当性や信頼性を保つことを困難にするおそれがある。

また，志願者本人記載書類の作成指導は個別指導を要するため，高校にとって大きな負担となっているのは加美山・倉元（2024b）が指摘している。この背景には，多くの高校生にとって志願者本人記載書類は自力で作成ができないものであるという事情もある。すると，選抜資料である志願者本人記載書類の設計が，志願者層に適していないという問題も浮かび上がる。

そこで本研究においては，志願者本人記載書類の特徴に着目し，高校における生徒の学力層と書類作成指導の困難さとの関係を明らかにする。これを通じ，書類様式の適切なあり方や選抜における扱いに関する検討に資するものとしたい。

2. 方法

まず，全国の 4 年制大学で実施される総合型及び公募制学校推薦型選抜（以下，特に言及がなければ学校推薦型選抜は公募制のものを指すこととする）を出願書類に着目して選出並びに評価し，これを変数として Ward 法による階層クラスター分析を行った。加美山・倉元（2024b）における「分析 2」がこれにあたる。統計パッケージは SAS Analytics Pro 9.4 を使用した。書類様式の選出は「人を対象とした研究」に該当しないため，倫理審査の受審手続きは取っていない。

次に，上述の調査及び分析より特徴ある書類様式 3 例，いずれも A4 判 3 枚組を選出し，これらを示して高校教員を対象に質問紙調査を行った（加美山・倉元, 2024a）。この調査は東北 6 県に所在する全ての高校 439 校に加え，これと同数になるようランダムサンプリングした東北以外の地方の高校を合わせて 878 校に調査票を送付し，所属する教員に回答を求めたものである。1 校あたりの回答者数は制限しなかった。内容は，回答者自身の属性や勤務校の設置形態等に関する質問のほか，志願者本人記載書類の作成指導に関わる質問である。本稿では，調査票のうち，3 つの書類例の書きづらさ等に関する質問（14）～（16）を中心に扱う。質問紙調査における例示書類例としたのは，いずれも志願者本人記載書類のうち，様式に特徴が見られるものである。例 1 の書類様式は探究的学習に関する記載を重視しており，これに関する問いを質問（14）にまとめた。書類例 2 は総合型や学校推薦型選抜の書類様式として標準的な，意欲に関する記載項目を中心としたものである。例 3 の様式は記載項目が細分化されておらず，志願者自身が体験への意味づけや論理的な説明を組み立てる裁量の大きな様式である。書類例 2 及び 3 についての問いはそれぞれ質問（15）と（16）にまとめており，内容は質問（14）と同じである。本稿では，これらのうち次の質問項目を取り上げる。まず，質問（14-2），（15-2）及び（16-2）では「例○の書類（3 枚）について，記述すべき内容や分量はどのように感じますか。以下の事項 A～E において，最もよくあてはまる数値をそれぞれひとつだけ選択してください。」とし，項目 C において「本校の標準的な生徒の実力で

は記述できない項目がある」を挙げて回答を求めた。回答選択肢は「1. かなりそう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. ほとんどそう思わない」である。また，質問（14-3），（15-3）並びに（16-3）は「『高校までの学習の成果』を表現するにあたり，貴校の標準的な生徒は例〇の書類（3 枚）についてどのように感じると思いますか。最もよくあてはまる数値をひとつだけ選択してください。」というものである。回答選択肢は「1. 手に余る」「2. やや手に余る」「3. 適切だ」「4. ややもの足りない」「5. もの足りない」である。質問（14-4）と（15-4），並びに（16-4）は「貴校の標準的な生徒が例〇の書類（3 枚）を作成する場合，以下の項目 A～F について，他者の助言や指導を受けずに，どの程度自力で書けると思われますか。最もよくあてはまる数値をそれぞれひとつだけ選択してください。」というものであり，項目は「A. 志望理由の記載」「B. 高校生活における諸活動の振り返り」「C. 資格・検定等の記載」「D. 学校外における諸活動の振り返り」「E. 探究学習についての振り返り」「F. 進学先での学修計画の記載」である。回答選択肢は「1. ほとんど自力で書ける」「2. だいたい自力で書ける」「3. どちらとも言えない」「4. ある程度の指導や助言を必要とする」「5. かなりの指導や助言を必要とする」である。質問（14-5），（15-5）及び（16-5）は「貴校の標準的な生徒が例〇の書類（3 枚）を作成するとすれば，全体としてどの程度の指導を必要としますか。最もよくあてはまる数値をひとつだけ選択してください。」である。回答選択肢は「1. 非常に多くの指導が必要だ」「2. やや多くの指導が必要だ」「3. 短時間の指導４～５回で十分だ」「4. あまり指導を必要としない」「5. ほとんど指導を必要としない」とした。質問（14-6）と（15-6），並びに（16-6）は「貴校の標準的な生徒に対して例〇の書類（3 枚）の作成指導をする際，以下の事項 A～C の指導において，あなたはどの程度苦労すると思われますか。最もよくあてはまる数値をそれぞれひとつだけ選択してください。」というものである。項目は「A. 指示文の把握」「B. 記述内容の整理」「C. 内容の文章化」であり，回答選択肢は「1. かなり困難に感じる」「2. 少し困難に感じる」「3. どちらとも言えない」「4. あまり困難に感じない」「5. ほとんど困難に感じない」とした。なお，これらの分析においては，選択肢番号を反転させたものを書類作成に関する困難度合いを表す数値として扱った。すなわち，書類作成にかかる難度が高いと受け取られるほど数値が高くなる。データの分析には SPSS Statistics 25 を用いた。質問紙調査は東北大学教育学研究科で研究倫理審査委員会の承認を得た。

3. 結果

3. 1 回答者層

はじめに，調査全体の有効回答 220 件について，回答者自身やその勤務校に関する属性項目への回答を集計した。回答者の教員経験年数は 21 年目以上が最多の 62%を占め，13～20 年目の 25%，7～12 年目の 9%が続いた。3 年目以下の回答者はなかった。直近 5 年間の主な担当分掌は進路指導部が 77%である。志願者本人記載書類の指導経験を有する回答者は 97%に上った。勤務校は公立が 84%，私立が 16%であり，国立校からの回答はなかった。所在地域は東北 6 県が合わせて約 7 割，続いて関東地方が 9%である。

3. 2 高校の大学進学実績と書類例への評価

次に，任意回答である勤務校名の記載があるもののうち，異動 2 年以内かつ前任校を想定して勤務校の指導体制を答えた回答を除外したデータ 172 件について，回答者の勤務する高校の大学進学実績（以下，「進学実績」とする）により 4 区分に分類した。進学実績には各高校の生徒の学力層が反映されていると考えたためである。この実績は令和 4 年度（2022 年度）時点のものであり，進学者割合の算出に用いた年度卒業生数と各大学への合格者数は「サンデー毎日増刊 2023 年度版大学入試全記録（毎日新聞出版大学通信，2023）」を参照した。記載のない学校については各高校ホームページで情報を補完している。分類指標と結果は表 1 に示す。なお，勤務校が同じでも各質問への回答内容が異なるため，回答件数による集計を行った。

表 1 高校の大学進学実績区分定義と回答数（n=172）

区分	定義	回答数
1	旧帝大１割以上	24
2	4 年制国公立４割以上（区分１を除く）	27
3	4 年制国公立１割以上（区分１・2 を除く）	32
4	その他	89

これを元に，志願者本人記載書類の作成及びその指導実態がうかがえる各質問項目と進学実績との相関分析を行った。結果を表2～6に示す。相関係数はいずれもスピアマンの順位相関係数である。

表2には進学実績と各書類例の記載項目に関する評価の相関，並びに各質問項目に対する回答全体の平均値をまとめた。進学実績と各書類例に回答者の勤務校生徒が記載できない項目があるかどうかに関する評価には弱～中程度の正の相関が見られる。中でも質問（16）で示した書類例3の相関係数が中程度となっている。表3は，進学実績と各書類例の様式へ記載する際に生徒がどのような受け止め方をするかの予想との相関分析の結果である。ここでも弱～中程度の正の相関が見られ，書類例3において相関係数が最も大きい。項目全体の平均値は4.0前後と高めの値となった。

表 2　高校の大学進学実績と書類例別記載量及び項目数に関する評価（抜粋）の相関並びに平均値（n=172）

	14-2-C	15-2-C	16-2-C
進学実績	.386**	.349**	.434**
項目全体の平均値	3.13	2.94	3.02

** $p < .01$

表 3　高校の大学進学実績と書類例別生徒の受け止め方予想の相関並びに平均値（n=172）

	14-3	15-3	16-3
進学実績	.347**	.354**	.437**
項目全体の平均値	4.12	3.85	3.94

** $p < .01$

表4は，進学実績と各書類例において志願者が自力で記載できると思われる程度の相関分析の結果である。書類様式の記載項目別に結果を示したが，いずれも弱い正の相関が見られる。また，項目全体の平均値では，「F. 進学先での学修計画の記載」や「A. 志望理由」のほか，「E. 探究学習についての振り返り」が高めの値を取った。表5には進学実績と各書類例の作成において要する指導の程度の相関分析の結果を示した。いずれも弱い正の相関が見られ，項目全体の平均値は全て4.0を超えている。表6は，進学実績と各書類例の様式に関して指導で困難さを覚える点についてそれぞれ評価を求めたものとの相関分析の結果である。「A. 指示文の把握」では書類例3のみ，「B. 記述内容の整理」と「C. 内容の文章化」については3例すべての書類様式で弱い相関が見られる。項目全体の平均値は「B」と「C」で全て4.0前後の高い値となっているのに対し，「A」が3.0付近の値となっている。

表 4　高校の大学進学実績と書類例別自力記載が可能な程度の相関並びに平均値（n=172）

	14-4-A	15-4-A	16-4-A	14-4-B	15-4-B	16-4-B
進学実績	.292**	.306**	.257**	.235**	.245**	.239**
項目全体の平均値	3.62	3.53	3.73	3.40	3.29	3.35
	14-4-C	15-4-C	16-4-C	14-4-D	15-4-D	16-4-D
進学実績	.273**	.315**	.329**	.281**	.381**	.377**
項目全体の平均値	2.43	2.48	2.65	3.37	3.18	3.23
	14-4-E	15-4-E	16-4-E	14-4-F	15-4-F	16-4-F
進学実績	.375**	.392**	.365**	.283**	.276**	.195*
項目全体の平均値	3.73	3.57	3.51	3.89	3.76	3.67

* $p < .05$　** $p < .01$

表 5　高校の大学進学実績と書類例別必要な指導の程度の相関並びに平均値（n=172）

	14-5	15-5	16-5
進学実績	.334**	.267**	.369**
項目全体の平均値	4.30	4.11	4.08

** $p < .01$

表 6　高校の大学進学実績と書類例別指導困難点の評価の相関並びに平均値（n=172）

	14-6-A	15-6-A	16-6-A	14-6-B	15-6-B	16-6-B
進学実績	.115	.127	.251**	.198**	.219**	.272**
項目全体の平均値	3.35	3.07	2.99	4.10	3.92	3.89
	14-6-C	15-6-C	16-6-C			
進学実績	.269**	.352**	.292**			
項目全体の平均値	4.05	3.97	3.96			

** $p < .01$

4. 考察

集計の結果から，質問紙調査へ回答を寄せたのは東北地方の公立高校に勤務する教員が多くを占めることがわかる。また，ほとんどの回答者が志願者本人記載書類の作成指導に関わった経験を有し，進路指導部員として広く勤務校における進学指導に関与した教員も多いと見える。教員経験年数が長い回答者が大半を占めており，進学指導の実態を反映した回答が得られたものと推察できる。

続いて，進学実績と書類様式3例への評価の相関について考察を加えていく進学実績を在校生の学力を反映するものと考えると，表2と表3より，学力の高い生徒ほど各書類様式への記述に対応できる力を有していることがわかる。また，表4からは，学力の高い生徒ほど志願者本人記載書類の作成に関わる力が高いということについて，記載内容にあまり関わりなく当てはまることがうかがえる。以上のような事情が背景にあることで，表5に示したように，学力が高いほど指導の必要程度が低くなるのだと考えられる。なお，表6では，記載内容の整理とその文章化という点で学力差による困難度合いの違いが見られる。文章の構成を考えたり実際に文章として表現したりするところで学力による差が表れやすいのだと解釈できる。このことは，構成の難しい長文の記載欄を有する書類例3についての質問（16）が，表2や表3で他の書類例よりも高い中程度の相関係数を示していることからも読み取ることができる。

ただし，書類例別の質問項目全体の回答平均値を鑑みると，学力が高い場合でも志願者本人記載書類の作成が容易ではないことが読み取れる。表3における項目全体の平均値は，各書類例に関する質問それぞれについて進学実績によらず全体を集計したものであるが，いずれも「手に余る」という回答に寄った高い値を示している。また，表4における項目全体の平均値は，学修計画や志望理由といった項目で特に値が高めとなっており，志願者本人記載書類における定番の項目で自力記載が困難であるという実態がうかがえる。これらは表5に示したような，各書類例における指導の必要程度がいずれも高い値を示し，「多くの指導が必要だ」という回答に寄った結果になったことにも繋がっていると推察される。表6では文章の構成や文章表現に関する項目で全体の平均値が高く，文章作成の困難さが自力記載を難しくしていることがわかる。

これらより，志願者本人記載書類の作成は志願者にとってもその指導を主に担う高校にとっても負担が大きいことがわかる。本稿で取り上げた分析によると，志願者層が高い学力を有している場合は書類そのものを資料として選抜を行うことができるとしても，識別力が高いとは言えないと考えられる。思考力や，思考内容を適切に表現する文章力を測るのであれば小論文や学力検査における記述問題がよりふさわしいだろう。加えて，志願者本人記載書類において問われることの多い志望理由や進学後の学修計画といった項目において特に自力記載が困難だと見なされていることは，書類作成の段階で他者の指導や添削が行われることがほとんど当然視されている現状に繋がってくる。すると，志願者本人記載書類に高い配点を与える等によりそれ自体を選抜資料として大きく扱うことは，志願者本人の実力を測ろうとするときに困難さを抱え，公平さの点からも懸念が生じることになる。したがって，大学入学者選抜における志願者本人記載書類は，基本的には面接試験の一資料とするなどの方法が利用の仕方としては適切であると考える。その際，書類様式の設計は複雑さを避け，志願者自身が記述しやすいものとすることで，志願者本人の学びの成果や実力を引き出しやすくなると思われる。

謝辞

本研究の一部はJSPS科研費JP21H04409の助成を受けたものである。

引用文献

加美山若奈・倉元直樹 (2024a). 大学入試志願者本人記載書類の作成における文章生成 AI 利用への印象―高校教員への質問紙調査から―. 日本教育心理学会第 66 回総会発表論文集, 印刷中.

加美山若奈・倉元直樹 (2024b). 多様化した大学入試の類型化―出願書類に着目した探索的階層クラスター分析―. 大学入試学会誌, 1, 印刷中.

毎日新聞出版大学通信 (2023). サンデー毎日増刊 2023 年度版大学入試全記録. 毎日新聞出版.

文部科学省（2023a）. 令和 5 年度国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要. https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1414952_00005.htm